



百合

「バカ」

第2問

次の文章は、小説『白』の一節である。主人公の「俺」は五歳の頃に母親である「お袋」を病で亡くした。父親の「親父」は四十年ほど鯉鮓屋を営んでいて、「俺」が三歳の頃から鯉鮓作りを仕込んでいた。「俺」が成人を迎える年の春、「俺」の作った釜揚げ鯉鮓が「親父」に認められた。以下はそれに続く部分である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

お袋がまだ生きている頃から料理をしてきたから、少なくとも十五年以上は親父の許で修行してきたことになる。

到頭あの頑固親父の首を縦に振らせた。

今来高嶺の花であつた親父の味に並んだということになる。

遂に自立する時が来たのだ。

店の名前・・・そうだ、「百合」にしよう。

お袋の大好きな、何時も世話をしていた花だ。

(注1) 競争にユーリ：なんて洒落の好きな親父も納得するだろう。

親父、お袋。見ていてくれ。

物心付く前からの夢——鯉鮓で人を幸せにする——を叶えてみせる。

俺は再度誓い、そつと仏壇にお袋の愛した純白の百合を供えたのだった。

(注) 1 競争にユーリ——「有利」と「百合」かけたダジャレ。「親父」はこうしたダジャレが好きであつた。

問1 傍線部「物心付く前からの夢」とあるが、貴方の夢は何であろうか。考察せよ。

問2 傍線部「叶えてみせる」とあるが、貴方の夢は実現されるであろうか。意思を示せ。

私は今、同じ大学に通う友達と、

瀬戸内海に浮かぶ小島、由利島に来ている。

なんでもこの島は、国民的アイドルグループが、

毎週出演するテレビ番組のロケを行っている島だそう。

今日はそのグループのファンである私たちのために、

テレビ局に勤める父が特別にロケへと連れてきてくれた。

間近にアイドルを見られるとあって、私たちは少し興奮気味。

スタッフはいつも、ロケの準備のため、朝早くから島に入る。

今回は私たちも一緒に島へと渡った。

アイドルは午後からやってくるらしい。

それまで暇なので、ロケ地周辺を散策してまわることにした。

番組でアイドルが作っている畑がある。

ちょっと中へ入ってみると、なるほど、野菜が植えてある。

畑のまわりには、いろいろな花が咲いている。

ふと顔を動かすと、目にとまったのは、百合の花。

近づいてみる。

きれい。

由利島で百合を見つけて、なんだか可笑しくなって、

友達と大声で笑った。

今日は、アイドルだけじゃなくて、もっと身近な、

素敵なものを見つけた気がした。

4 卒業式前日、放課後

「あー、明日で私達卒業かー」
だねー

「三年間通ったこの学校も明日で最後つてなるとなんだか名残惜しいね」

どうしたの、急に。ユッコらしくないよ？

「なんだよ、アタシが感傷に浸っちゃ悪いのかよー」

そう抗議の声を上げるユッコは平静を装っていたが私にはわかる。あれは何かを言い出せずにいる顔だ。

でもユッコと知り合ってからもう三年か……早いもんだね

こういうとき無理に聞き出すとユッコは機嫌が悪くなるので思い切つて話題を変えてみる作戦に出る。

「最初の半年はお互い顔もよく知らないような関係だったから、実際は二年半くらいじゃない？」

じゃああの調理実習以来かな？

「そうそう！ ヒロが麵棒で大立ち回りした……」

もうっ！ その話はやめつていったでしょう

「えへへ……」めんめん……」

……話題転換作戦は失敗だったみたいだ。

気がつけば変な沈黙が降りてきてしまった。

「ねえ、ヒロ？」

ん？どうしたの？

「あのさ、キスしょ？」

なんで？

「いや、高校最後の思い出づくりにつて思つて…… それともアタシとなんかじゃキスした

く、ない？」

そっか、キスカあ……

ユッコとなら全然嫌なんかじゃないけど、今の

ユッコはしおらしくていじめたくなっちゃう

なあ。

うーん、私はじめてなんだけど……

「あ、アタシだつてはじめてさ！ け、けどヒロにだったらアタシのはじめてをあげてもいいつ

ていうか、むしろヒロがいいつていうか、あーも

うなんか言つてて恥ずかしくなつてきた、んつ」

ああ、ユッコの唇つて柔らかいなあ。

それにしつとり暖かくて、気持ちいいな。

◆ ◆ ◆

「うー、いきなりなんてズルいぞ！」

えへ、あんまりにもユッコが可愛らしいから、つい。それにしようつて言つてきたのはユッコの方じゃない

「それはそうだけど、やっぱり心の準備とかさ、もうちよつとあつたと思つて」

そう？ ならもう一度、今度はユッコの思うようなキスをやり直そ

「んっ…… じゃあいくよ……」

そう言つてユッコはゆっくり顔を近づけてきたので私はユッコに委ねるつもりで目を閉じた。

程なくしてお互いの唇が触れ合う感触がする。そのまま首に腕を回され、がっちりと抱き合う形になる。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「はあ…… うん、満足！」

ユッコは、濃厚なのが好きなんだね

「ヒロはこういうの、キライ？」

ううん、私も好きだよ

「えへ…… よかつた」

夕陽が最後の光で二人を照らし出す。

「それじゃ帰ろつか」

「そう、だね……」

「卒業したつて私達、ずっと一緒だよ」

「もちろん！」

そして再び、教室には静寂が訪れる。

「そうだ、今日うち泊まつてかない？」

「え！ いいの！？」

二人の夜は、まだ始まったばかりである。



自慢ではないが、僕の彼女は美人だ。彼女とはインターネットの掲示板で知り合ったのだが、肌は透き通るように白く、顔立ちは端麗で、お姫様と呼ぶのに相応しいような美しさだ。あまりの美しさに始めは一緒にいるだけでも気恥ずかしかった。最近はやややく慣れてきて、昨日は3回目のデートの後で初めて彼女とラブホテルへ行き、一緒に寝た——はずだった。

目が覚めると横には僕の知っている彼女はいなかった。そこにいたのは、漆のように黒い肌をして、真っ赤な目と鋭い角と歯と爪を持った、凄まじい形相の鬼女だった。僕は叫び声を上げようとしたが、体がほんの1ミリも動かず、声も出なかった。金縛りだった。鬼女は僕に馬乗りすると、その鋭い爪を僕の首筋を這わせた。まるで僕のことなどいつだって殺せるのだぞとも言おうだった。鬼女はその爪を少しずつ下に移動させ、胸まで下した。鬼女はにやりと微笑むとその爪で僕の胸を裂くように引っ掻いた。

「……………!!!!」

全身に痛みが走る。しかし、声が出ない。鬼女はそれをあざ笑うかのようにもう一度僕の胸を掻いた。痛みに悶えている僕を見て楽しんでいるようだった。それを何回繰り返しただろう。鬼女の爪はすっかり赤く染まり、僕の体力は限界に近づいていた。鬼女は恍惚の表情を浮かべていた。その表情を見て僕は気が付いた。鬼女は僕の彼女ではないのか。恐ろしい形相をしていたので気が付かなかったが、よく見ると顔立ちは彼女そのものだった。僕の疑いは確信へと変わった。

目が覚めると僕の上に跨っている鬼女などおらず、横には彼女が眠っていた。彼女は綺麗な寝顔をしていた。さっきまでの事は夢だったのだ。僕はどうしてあんな夢を見たのだろう。取り敢えず僕は悪い夢から覚めたことに安心して起き上がった。すると、胸に鋭く痛みが走った。それは先ほどまで僕が感じていたものと全く同じ痛み。あれは夢ではなかったのか。ふと横を見ると目を覚ました彼女が微笑んでいた。しかし、僕は自分の目を疑った。彼女の爪は血で真っ赤に染まっていた。夢なんかではなかった。彼女は姫であり、鬼であつたのだ。

「……そうか、君は百合だったんだな」

僕がそう言うと、彼女は微笑んだまま百合の花びら1枚を残して消えた。



一日に五本しかない小田急線で、新宿駅を出てからというものの、窓の外には廃墟しか見えない。昔遊びに行ったことのある下北沢、ここにも全く人影が見えず、ただただ荒れ果てたビルが立ち並ぶだけだった。

どれもこれも、戦争のせいだ。数カ月前にやっと終結したとはいえ、日本の人口はほとんどゼロになったと言ってもおかしくない程だ。恐らく、終戦後再び東京に集まってきた数千人しかいないのではないだろうか。何故なのかは良くわからない。戦争で使われた化学薬品のせいもあるのか、政策の関係もあるのか、女性には特に少ない。マスコミは日本で十人しかいない女性だと言つて私取材しようとする。もうやめてくれないかな。

新百合ヶ丘、新百合ヶ丘―

どうやら終点に着いたようだ。

改札を出ると、待ち合わせていた女性はすぐに見つかった。

「こんにちは、はじめまして」

私たちは話し始めてすぐに打ち解けた。

「こんな状況なのに、なんで日本に残ってるんですか？私、自分で何故だかわからないんです……」

「実は私も。不思議と外国に逃げようとは思わないんです……」

「でも、ここは周りに何も無いし、生きていくこと自体、大変じゃないですか？」

「いや、前ほどひどくはないですよ。戦争が終わってから、新宿まで出れば食料も変えますし」

色々な事を話した。本当に信頼できる人だと思った。

そんな中、自分でも自分が言った言葉に驚くことになった。

「私と、付き合ってくださいませんか」

『戦地に咲いた百合』



庭の百合がちょうど芽を出す頃、僕は彼女と出会った

多分一目惚れだったと思う

彼女に近づきたくて

彼女を知りたくて

大切にしたいくて

愛したくて

僕は、彼女と共に歩き始めた

彼女を想い焦がれながら

ふと庭を見ると

真っ白な百合の花が咲き誇る中、一つだけ開いていない蕾があった

まだその蕾はしっかりと閉じられていて、開く気配もなかった

だから

この蕾が開く頃には彼女ともっと仲良くなれるだろう

そう思っていた

でも

彼女に近づけば近づくほど

僕は彼女が分からなくなって

大切にできなくて

傷つけてしまつて

僕たちは、いつの間にか違う道を歩いていた

彼女を想い悲しみながら

ふと庭を見ると

そこには僕を嘲笑うかのように、百合によく似た一輪の橙色の花が咲いていた



「ねえ、私、会社の先輩に言われたの。結婚を前提に付き合ってほしいって」

世界が朱色に染まる頃、一輪の百合の花が言の葉を零す。

「あの人はとても優しいし、仕事熱心だし真面目だし、きっと、幸せにしてくれると思う」
秋風が、芸術品のような髪をそつと愛でる。

「でもね…さつき断つたわ、私。」

茜の海を、羊達が駆けていく。世界の終焉から逃げるように。

「私は、彼を愛せない。貴女と会って、恋に堕ちてしまったから」
しつとりと、黄昏の世界が足先から姿を消していく。

「ズルい人よね、貴女は。私をこんなにしておいて、愛してるって言うておいて。
いつまでも一緒にいようって誓っておいて。」

世界がゆつくりと表情を変えていく。喜びから、絶望へと。

「あんなにあつさり、私をひとりにするんだから」

東の空に涙が一滴光る。迫る絶望に抗うかのように。

「あなたにプレゼントがあるの。私だけ貰いっぱなしには出来ないから」
花と花の擦れる音が、悲しげに静寂を裂く。

「黒百合の花。貴女が最後に私にくれたのと同じ」

冷たい土の上に置かれたそれは、絶望を吸い込んだ色をしている。

「花言葉、知らなかったよ。ねえ、貴女にとって、私はなんだったの？」

絶望を照らす監視者は、未だその姿を見せない。

「ねえ、もう何がなんだか分からないの。帰りたいの、あの頃に。」

ただ笑っていられた、あの頃に」

闇の中で鈍く輝いたのは、過去へ導く片道切符。

「ねえ、また、会えるよね…お姉さま」

絶望の中で、一輪の花が散った。



「上京」

久しぶりに実家に帰ると玄関に一輪のユリが飾ってあった。

確か花言葉は無垢だったわけ：

この白く美しいユリの花はなんだか今の自分にすごく似合わないような：そんな気がする

社会人になって上京してもう3年が経った

こんな田舎から早く出て

東京で憧れのオフィスレディになってやるんだ！と意気込んでいたあの頃が懐かしい

今となっては

小さな会社の下っ端としてこき使われて

愚痴ばかりこぼしている

一緒に上京した友達は銀座の大きな会社で

いきいきと仕事をしているのと自分を比べて

僻んでばかりいる

懐かしい家のおい、窓から差し込む光が

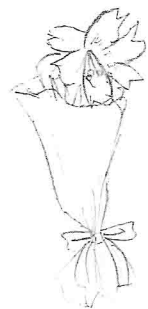
こんなにも優しく温かいものだとか今まで気付かなかった

私は3年ぶりに涙を流した

いろんな気持ちも一緒に流れていったようだ

私もこのユリの花みたいにな

きれいな気持ちに戻れたような気がした



新番組のお知らせ

一つの悪も許さない

十人十色の正義の士

百令わさりて敵はなし

百人一首戦隊

ワカレンジャー

2月17日(日) あさ7時30分スタート

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	一合の酒 百合の涙	14 pt	1 位	3 sp
		悲劇を暗示する今週の表紙です。 対句がキレイに入って、お題のあしらいもユニーク。 ダメ、絶対！あらためて肝に銘じよう、そうしよう。 でも意外でしたね、あれだけ本選常連さんなのに初勝利ですかそうですか。最多特別賞も付きました。 おめでとうゴールド・メダル!!!!!!!!!!!!!! 特別賞：ぎゃっははははははははh賞 from S班 （ぎゃっははははははははh）百合の酒に空目したで賞 from U班（百合の酒をあけるのはヤバイ）注意しま賞 from W班（大学生っぽい）		
02	第2問	6 pt	6 位	1 sp
		センター国語キター!! もっともらしく構成しつつ、ムイミな注にムチャな設問、よいですねえ、このハズシ加減。ツボでした。 某さかな氏との第2問対決を制しての本選入りで、イチオシフリーズ大賞をさらいました。おめでとう!! 特別賞：スピンスピンよりマシで賞 from Q班（センター試験に出てもいい） イチオシフリーズ：「競争にユーリ」×3		
03	ユリイカ	0 pt	9 位	0 sp
		タイトルのうまさに唸りました。ユリイカへ来るとは、教養高っ!! 高すぎて各班で苦戦だったのが残念です。 由利→百合→ユリイカ、連想で変化するごとにストーリーが展開して、とても構成のきれいな佳品でした。		
04	卒業式前日、放課後	0 pt	9 位	1 sp
		定番のシチュエーション、別れが近くなって気づくお互いの気持ち。王道展開ですね。 シール投稿にもかかわらず、敢えてこのあとの夜まで踏み込まなかったところに作者さんの良心を見た！ そのあとの展開は、みなさまの妄想のなかでどうぞ。 特別賞：もしかしてヒロは男じゃ……あ、違うか賞 from V班（ヒロ男で読み進めるといけ……ないね。 （笑）		
05	姫百合と鬼百合	1 pt	8 位	0 sp
		夢かと安心させておいて、やっぱりホラー。いやむしろ日本的な怪談の趣き、恐いです。 姫であり、かつ鬼。能面を思い浮かべました。イメージの豊饒さとメッセージ性◎。 イチオシフリーズ：「……………!!!」		
	戦地に咲いた百	7 pt	5 位	3 sp
		日付印字まで演出するとは、やるなあ。 長いストーリーの始まりのような、廃墟からスタートするドラマ、スケールの大きさにわくわくです。 仕掛けのおもしろさが受けて最多特別賞です、おめで		

06	合	とう!! 特別賞：2301賞 from R班（2301） あなた誰ですか賞 from X班（お前誰だ？） 未来から印刷がんばったで賞 from Y班（2301年よりよろこぞ） イチオシフリーズ：「食料も変えますし」 「2301.01.23」
07	季節外れの藪萱草	10 pt 3 位 0 sp 花のうつろいと人間ドラマがきれいにシンクロして、細かくは描写されていない彼女さんの儚さが、さらりと伝わってきます。 ヤブカンゾウ、たしかにオレンジの百合っぽい花ですね。雅趣に富む演出でした。おめでとうブロンズ・メダル！
08	黒百合	8 pt 4 位 0 sp これはムズい。スピンスピンなセンター国語よりムズい。言葉をじっくり咀嚼して、イメージを組み立てつつ追ってゆくと、ゆったりとドラマが浮かび上がってきます。 舞台の上での独白のような、きりりと引き締まった構成ですね。 イチオシフリーズ：「絶望の中で、一輪の花が散った。」
09	上京	11 pt 2 位 0 sp 育った家の空気はまた格別なもの。 都会暮らしでかじかんだ心が、ゆっくりゆっくりほぐれていって、要らないものをざっと流したら、きよらかな百合へ寄り添ってゆける。あたたかな展開にほっこりします。 寒い季節にみんなの心をなごませるのシルバー・メダルでした、おめでとう!!
10	ワカレンジャー	3 pt 7 位 2 sp ラストは歌詞ではっちゃけよう。 百人もいたら覚えきれるかしら、が心配ですが、まあAKBみたいなもんじゃないかな。 なかなかのナイス☆アイディアで、今週のイチオシフリーズ大賞ゲットです。おめでとう!! 特別賞：しつと深いで賞 from T班（そんなに別れさせたいか） おそらく初回だけで終わるで賞 from Z班（自己紹介だけで30分） イチオシフリーズ：「百合わさりと敵はなし」×2 「ワカレンジャー！」